



「一緒に浮かせてみようよ！」



「Aちゃん、実験成功！」



「床の方がうまく貼れた！」



「まっすぐ立たないなあ〜」

CASE 23
5歳児



ぼくの船は、神社船！

協力園
大分明星幼稚園

(幼児の実態)
4月、新型コロナウイルスの影響でクラス全員が揃って過ごすことが出来ない日々が続きました。そんな中、友達と会えるようになった6月を迎えた5歳児クラスの子どもたちは、友達と遊べる喜びを今まで以上に味わっています。砂場では、砂を深く掘り、川作りが広がっています。樋を使って水を流すことを思いつく姿もあります。そこに保育者が木の葉を一枚、樋に入れてみました。樋から流れて溜まった水に浮かんだ葉を見て、「船だあー」、「あっ、沈んだ！」、「沈まない船がほしい！」と言葉を発します。そんな子どもたちの思いから、後日、船を作るようになりました。

今日は、広い遊戯室が船工場になり、子どもたちは、船大工です。子どもたちは、『船を作るところを船工場、船を作る人のことを船大工と呼ばれていること』の説明を聞きながら、船づくりへの思いを膨らませています。

「早く船工場に行きたい！」と、待ちきれない様子で、保育室から遊戯室に移動していきます。遊戯室の中は、青のビニールシートが床いっぱい広げられ、海の雰囲気です。周りには、材料や用具のコーナー、作った船を浮かべることができる水の入ったタライも並んでいます。

船工場の子どもたちは、「わあー」と声を出し、さっそく、材料探しを始めます。「大きい船がいいな。」と自分の船のイメージに合う材料を見つけた姿や、「これは、船の形に似ている。」など、材料からイメージを膨らませている姿が見られます。

A児は、平たいプラスチックの皿とトイレットペーパーの芯を選んでいきます。最初にトイレットペーパーの芯を側面に沿って、まっすぐに切り、2センチぐらい幅の平たい紙棒を2本作りました。そして、作った紙棒の横幅を半分に折った後、折り目を少し開き、縦にして、机の上で立つかどうか確かめています。立つことが分かると、次にプラスチックの皿の上に立てようとしています。

A児は、プラスチックの皿を船体に見立て、縦に立たせた棒は船の帆をイメージしているようです。

しかし、船体にした皿の表面は、少し凹凸があるので縦棒は、倒れてしまいます。『どうしよう』と考えている様子が見られましたが、すぐにセロテープを丸め、皿に貼っています。その上に縦棒を置き、手で支え、縦棒と皿が付くように、4カ所にテープを貼りました。少し斜めですが、立ったことに納得したようで、「これでいいや。」と発し、もう一本も縦棒にして立たせようとしています。2本目は、最初から斜めに立たせました。2本が対称になるようにバランスを考えようとしています。次は、もう1本の紙の棒を作ると、横棒にして、2本の縦棒の間を橋のようにつないでいきます。机の上では、縦棒がからついてうまく貼れないことに気づくと、床に移動しました。床の上で貼ることで、上から手で押さえる力の加減がしやすくなったようです。船体に無事、帆が立ち、A児のイメージした船が形になってきました。

保育者は、周りの子どもたちの声に耳を傾けながら、A児が自分でやり遂げようとする姿を見守っています。周りでは、船を浮かべて、浮く状態を試している友達が増えてきました。

A児が、まだ船を浮かせていないことに気付いた友達が、「Aちゃん、こついで浮かせてみて！」と声を掛けています。「先生も見たい！」と、先生も一緒にA児の船が浮くのを見守ります。A児が船を浮かせると、「浮いた、浮いた！」と周りの子どもたちが歓声を上げ、拍手をします。A児の船の形に鳥居を思い浮かべたのか、「神社船や！」と名付ける友達もいます。「実験、成功！」と先生も一緒に拍手です。A児は、自分の船に名前がついたことを静かに受け入れています。嬉しそうな表情から、自分の船に満足していることが伺えます。

少し離れた場所では、浮かせることに集中していた子どもたちが、「動くといいな！」「自分の思いを伝えていきます。」「牛乳パックを長くつないで、上から水を流したらいいじゃない。」「子どもからのアイデアが出されると、保育者は、「いい考え、やってみよう。」「とすぐに、実践。上からペットボトルに入った水を、牛乳パックを樋にしてタライに流すと、タライの中の水が振動し、船がゆらゆらと動く様に、大喜びをします。

子どもの提案を受け入れ、寄り添った先生の関わりは、子どもたちの気持ちを満足させ、充実感につながっているようです。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿
「10の姿」

言葉による
伝え合い

思考力の芽生え

自立心

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じとったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気づき、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

事例から見られる10の育ち

思考力の芽生え

材料探しをしながら作るという船のイメージを膨らませている。また、船の帆を立てるために紙よりも少し厚いトイレットペーパーの芯を選び、船体に合う幅を考えて芯を切っている。立たせるために、横幅を半分折り、折り目を少し開いて立ち易くしたり、セロテープを両面テープのように使い方を工夫したりする。2本の紙棒をバランスよく対称に立てる。机の上より床の上の方がやり易いと考え、場を変えて取り組む等、試行錯誤している姿が見られる。

こつとした姿からこれまでの生活の中で得た知識や新たに気付いたことを、やってみながら確かめ、どうしたらうまくいくか、自分なりに考えようとしていることが伺える。

事例から見られる10の育ち

言葉による伝え合い

A児の船が完成したことに気付いた友だちから声を掛けられ、船を浮かべることが出来ると、他児や保育者から歓声と拍手が起った。友達のことを自分のことのように喜び他児の姿や側で見守る保育者の関わりの中で、A児は、安心して心のやり取りをしている。また自分の船に名前が付けられ嬉しい気持ちを味わう。こう言った嬉しい、楽しい気持ちを全身で伝え合うことも、言葉による伝え合いの姿と言えるのではないだろうか。

思考力の芽生え・言葉による伝え合い
環境構成のポイント

- 自分のイメージを広げられる材料・素材・用具が広いスペースに十分に準備されていること。
- 作った船をすぐに浮かせることが試せるように、水の入ったタライを並べていること。
- 子どもが試行錯誤しながらイメージした物を実現させようと取り組んでいることを認めながら見守る保育者の存在。
- 子どもから出た発想と一緒にやってみようとする保育者の関わり。
- 互いに存在を認め合い、嬉しい、楽しい気持ちを共有できる友達の存在。